平成１９年度 研究のまとめ　　仙台市立黒松小学校

■新たな研究の種を蒔く

本校では昨年度まで，「確かな学力を身につけさせるための指導法の改善」をテーマに，算数少人数・習熟度別指導，教科担任制の研究を５年間積み重ねてきた。その中で，自分の思いや考えを適切に表現したり，友達や先生との良好な人間関係を構築したりすることが苦手な児童の存在が，新たな課題として浮かび上がってきた。

そこで，今年度は新たに「表現力・コミュニケーション力を高める指導方法の工夫」を研究主題に掲げた。児童が自主的・自律的に学び合いに参加して創造的な知性を育み，よりよい人間関係を築きながら互いを思いやる豊かな情操を養っていくためにも，「表現力・コミュニケーション力」を高めていくことが大切になると考えたわけである。今年度は３年次研究の１年次であることから「課題の明確化」を目標とし，学年または個人で研究計画を立てて多様な実践を出し合いながら研究を進めることとした。

４月４日の第１回研究推進委員会では，問題意識を共有するために，委員が交互にウェビングで模造紙に書き込みながら，以下のような研究のキーワードを出し合った。

「表現力」…「思考力」「判断力」「語彙力」「表情－目」「話す－聞く－書く」
「言語環境－読書や読み聞かせ」「感動－心に残る経験や活動」「言葉遊び－ユーモア」
「コミュニケーション力」…「あいさつ」「思いやり」「相手意識」「相手との距離感」「ディベート」等

また，研究を進めていく際には，国語科で培っていく国語力（伝え合う力）を基盤とし，他の教科・領域の実践ではその時間の学習のねらいを達成することに主眼を置くことを確認した。つまり，「表現力・コミュニケーション力」の向上が教科・領域の目標達成に効果を発揮することを大切にしたいのであり，「研究主題にとらわれるあまり，教科・領域の目標をないがしろにしない」ということを念頭に置く必要があったからである。その上で，教科・領域の特性に応じた指導方法の工夫と実践事例の蓄積を図ることとした。

■種から芽へ

第１回推進委員会の後，先生方に校内研究ワークシート No.1 を配布し，表現力・コミュニケーション力がそれぞれ児童に身についた状態を書き込んでもらった。そして，それらを集約した表をもとに，５月７日の第１回研究全体会を行った。そこでは，異学年・少人数の５グループを構成し，どのような研究にしていきたいかをワークショップ形式で話し合った。そして，校内研究に対する提案をグループごと模造紙にまとめて全体に発表し，先生方の研究に対する思いや願いを共有した。

- □ **１班** … 子どもの思いを大切にし，引き出す手だてを探る。
- □ **２班** … 自分の思いや考えを相手に伝えるスキルを，学年や学級を土台にして指導する。
- □ **３班** … パターンづけ→より具体的に→書く活動を通して→交流・発表場面を多く取り上げ
  →スキルアップトレーニング（授業＋日常活動）
- □ **４班** …＜低学年＞話し方や答え方のマニュアル化，話したくなる楽しい体験
  ＜中学年＞ワークシートや五感のマークの利用
  ＜高学年＞ディベートなどで話し合う力をつけていく
- □ **５班** … 思いを伝えたくなるテーマの設定，学年に応じた話し方スキルの習得，スキルと話したいという思いのバランス

こうして，今年度の研究の方向性が定まった。その後，学年または個人で研究教科・領域を決め，７月から１月にかけて全員が研究授業を実践した。また，仙台市教育センター要請訪問３日コースにおいて，４年１組の高山未帆教諭が研究授業を行った。教材研究や指導案検討の段階から渡邉友子先生に加わっていただいて指導・助言を受けたことにより，全職員の研究に対する意識を高め，教材研究の大切さを学ぶことができた。さらに，７月と１月には，全校児童の意識調査を実施した。

■研究の成果

今年度研究の主な成果は，以下の通りである。

○学習形態の工夫

・ペア学習やグループ学習，ディベートなどを取り入れたことで，自分の考えを持って意見を交換したり，認め合い励まし合いながら学びを深めたりしている姿が見られた。
・算数の少人数グループでは，個に応じた指導・支援が容易にでき，児童も安心して発表や話し合いができた。

○場の設定の工夫

・教室での移動式ホワイトボードの複数利用や机の配置，多目的室での学習など，学習活動の場を工夫することで，グループの話し合いに集中して取り組むことができた。
・学習感想による振り返りの場面を設定することで，自分の思いをはっきりと発表できるようになった。さらに，発表を通してお互いの発表の方法や考え方の良い点を認め合えるようになり，児童同士の交流も深まった。

○ワークシートや学習カード・評価カードの工夫

・学習のねらいに沿ったワークシートを活用することで，児童は自分の考えを整理し，自信を持って発表することができた。
・話型を書いたカードや簡単な台本の活用は，発表や話し合いの仕方，手順などを学ぶのに有効であった。
・自己評価カードや他者評価カードを活用することで，プレゼンテーションのスキルを高めていくことができた。

○メモの取り方の工夫

・要点をまとめながらの書き方や短い言葉に置き換える書き方の練習を行うことで，次第にメモを取ることに慣れて抵抗なく書けるようになった。

○掲示物の工夫

・聞き方や話し方のポイントを教室に掲示することで，すべての学習場面での聞く・話す時のめあてを意識させることができた。

○日常的な活動の工夫

・朝や帰りの会のスピーチで，テーマや時間を限定したり，サイコロトーキングや新聞記事を活用したりすることで，自分の思いや考えを恥ずかしがらずに発表できるようになった。また，聞き手はしっかり聞いて質問することを習慣化することができた。
・日記や詩のたね探しなどを続け，生活や自然など自分の周りのことにも目を向け，友だちと共感できるようになった。

■課題の明確化

２月１８日の第５回研究全体会では，ワークショップ形式で今年度の成果と課題の振り返りを行った。まず，自分が考えた課題をワークシートに端的な表現で書いた。次に，自分の学年（個人）の研究概要（教科・領域と単元，本時の内容）を簡単に紹介し合った。そして，各自が考えた課題を出し合い，グループとして提案する課題について話し合った。それを短冊に書いて全体の場で発表し，最後に課題を集約した。

□１班 … ① 系統性のある話し方のスキルアップ
② ワークシートの有効利用（評価，深まりの手段のため）
③ 自己表現力を高めていくための日常的活動の工夫
□２班 … ① 縦の系列化（スキル的側面）
②（コミュニケーションの中から）より質の高い内容へ
③（①②を踏まえての）日常化
□３班 … ① ワークシートの活用
② 表現力・コミュニケーション力の系統をはっきりさせる
③ 指導方法（手だて）の情報収集と交換
□４班 … ① スキル（話し方・聞き方）の系統性
② 学年ごとの表現力・コミュニケーション力の目指す像
③ 発表したくなるような環境・課題づくり
□５班 … ① 系統立てた国語（表現力・コミュニケーション力）スキル
② 自己評価力の育成
③ 評価シートの活用と工夫

▲課題① ： **指導事項（スキル）の具体化・系統化**
▲課題② ： **ワークシートや学習カードの工夫と効果的活用**
▲課題③ ： **意図的・計画的な学習場面の設定**
▲課題④ ： **評価規準・評価方法の明確化と自己評価能力の向上**
▲課題⑤ ： **日常的な活動の工夫**

■課題解決のために

まず，**課題①**として，表現力・コミュニケーション力の指導事項（スキル）を具体化した系統的段階表の作成が挙げられる。教師と児童が共に身につけるべきスキルを明確に認識することで，日々の学習を通して着実にレベルアップを図ることができると考える。課題の②④とも共通することだが,児童用のスキルチェックカード作成や教室掲示も有効であろう。実際の指導にあたっては，相手意識や目的意識をはっきりさせ，何のために表現するのかといった学習の見通しを児童にきちんと持たせることが大前提となる。なお，新学習指導要領（改訂案）をもとに研究主任が作成した「表現力・コミュニケーション力の学年系統表（案）」を，次年度研究でさらに吟味・検討し，実際に具体的学習場面で活用できるものに修正・改善していきたい。

次に，**課題②**のワークシートや学習カードについては，今年度も学年ごとに工夫したものを作成し，実際に使ってきた。それらを生かしつつ，次年度はさらに学習内容に合った効

果的な活用を目指していきたい。その際，要請訪問からも学んだように，児童にとって過度の負担になったり思考を狭めたりすることのないよう，教材研究に根差したワークシートや学習カードの作成を心掛けていきたい。それと同時にノート指導を見直し，児童自身が普段からノートを工夫・活用できるようにしていくことも必要であると考える。

そして，**課題③**についてであるが，単に児童が活発に発言している授業をよしとするのではなく，児童同士が関わり合う学習場面を意図的・計画的に設定していくことが，真に表現力やコミュニケーション力を高め発揮させることにつながるものと考える。つまり，他者と意見や感想を交流する学習場面を設定することで，自分の知識の確かさや考えの立場について児童自ら確認でき，知識や考えを自己修正することが可能となるのである。さらに，対話の質の向上を図ることで，自ら課題を発見し，話し合いによって自ら解決の方策を見出せるような学習集団へと高まることが期待できる。また，教えることは最大の学習でもある。ペア学習やグループ学習，ジグソー学習など学習形態を工夫し，児童同士が教え合う学習場面を学年に応じて意図的に設定していきたい。

その際，グループの人数やメンバーの組み合わせ等にも配慮したい。４人グループで発言に消極的だった児童が，３人グループだと積極的に発言するようになるケースも見られる。また，児童の実態を十分に把握した上で，生活班とは別に教科・領域によって柔軟に学習グループを構成することも必要であろう。また，教師はとかく効率性を求め，児童の学習活動を急がせる傾向にある。児童が落ち着いて自由な発想ができるように学習環境を整え時間を保証すること，すなわち思考のための沈黙の時間（待つこと）を大切にしたい。そうして多様な考えが出ることにより，学びの深まり・広がりが期待できる。

それから，**課題④**の評価に関することであるが，評価を指導に生かすためには，単元全体や単位時間ごとの評価規準を作成し，指導事項（指導課題）を明確にすることが何より大切である。その上で，単元に応じて評価チェック表を作成・活用し，形成的評価を指導の改善に生かすよう努めていきたいと考える。また，児童の自己評価に関しては，学びを振り返らせ，自己の課題を明確にさせるような自己評価カードを活用したい。学習内容によっては，相互評価を取り入れることも有効であろう。なお，児童自身の中に評価規準が確立されていないと，自己評価での過大評価や過小評価が起きることがあるので，注意が必要である。

最後に，**課題⑤**の日常的な活動の工夫については，今年度の取り組みと同様，朝の会や帰りの会でのスピーチ，スキルタイムの活用などが考えられる。特に，コミュニケーション力の向上のためには，学級づくりが土台となる。コミュニケーションは，お互いを大切に思うことで成り立つものである。担任は，受容的態度と要求的態度のバランスをうまく取りながら，学級集団の学びの質を高めていく必要がある。そのためには，教師自らが手本を示すことである。よき聞き手であるためには，受容的態度で児童が満足するまで話を聞いてあげ，その後で児童自身が考えを整理したり改めたりできるような質問や声がけをするとよい。また，よき話し手であるためには，教師の声がけを児童がどう受け止めるかを想像しながら，適切な言葉を選んで話すことである。その際，児童が教師を受容できていることが前提となる。信頼がなければ，教師の声がけは全て児童の警戒心や反発を招くだけのものとなる。「言葉遣い」を「心遣い」ととらえて，目や態度・表情で言葉を相手の心に届けることを大切にしたい。

なお，４月実施の仙台市標準学力検査については，国語の「話すこと・聞くこと」領域の校内平均正答率が３～６年生で期待正答率と全国平均正答率を上回り，概ね良好な結果が得られた。今後も，次年度以降の検査結果を指導改善の一助とし参考にしていきたいと考える。

■きれいな花を咲かせるために

平成２０年２月に文部科学省が発表した学習指導要領改訂案では，「言語活動の充実」が取り上げられた。また，総則「教育課程編成の一般方針」の「指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項」の中には，以下の記述がある。

> 各教科等の指導に当たっては，児童の思考力，判断力，表現力等をはぐくむ観点から，基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視するとともに，言語に対する関心や理解を深め，言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え，児童の言語活動を充実すること。

本校の研究主題は，言語活動の充実という点において，時宜を得たものと言えよう。

また，世の中の国際化・グローバル化が急速に進む今日，異文化共生が重要な課題となり，学習指導要領改訂で新たに高学年に「外国語」が新設されることになった。そこでは，特にコミュニケーションが重要視され，以下のような例が示されている。

〔コミュニケーションの場面の例〕	〔コミュニケーションの働きの例〕
(ｱ) 特有の表現がよく使われる場面 ・あいさつ・自己紹介・買い物 ・食事・道案内など (ｲ) 児童の身近な暮らしにかかわる場面 ・家庭での生活・学校での学習や活動 ・地域の行事・子どもの遊びなど	(ｱ) 相手との関係を円滑にする (ｲ) 気持ちを伝える (ｳ) 事実を伝える (ｴ) 考えや意図を伝える (ｵ) 相手の行動を促す

この「外国語」新設を負担に思わず，前向きにとらえたい。異文化理解を通しての表現力・コミュニケーション力を育成するよい機会ととらえ，次年度仙台市教育センターで新設される「小学校英語中核教員研修会」と連動させながら，校内研修を進めていきたいと考える。

言葉は，自分の思い通りにはなかなか伝わらないものである。誤解を生まないためには，言葉で伝えることの限界を認識した上で，言葉を省かずきちんと伝えることを心掛けることである。また，心を耕すことで，共感できるようになる。すると，相手の言葉の先が読める。このことが，相手を意識し心の通い合った双方向のよりよいコミュニケーションへとつながる。体験や読書など，児童の内面が磨かれ豊かになるような促しをぜひ大切にしていきたい。

今年度の研究を通して明らかになった課題をもとに，次年度は指導の手立てをより明確にできるように研究に取り組んでいきたいと考える。

平成１９年度（１年次）	平成２０年度（２年次）	平成２１年度（３年次）
課題の明確化 ＜種から芽へ＞	手立ての明確化 ＜芽から花へ＞	変容の明確化 ＜花から実へ＞